

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

保育者養成におけるソーシャルワークの学びの一考察：保育実習における指導を中心に

著者	矢野 明宏, 百瀬 ユカリ, 五十嵐 淳子
雑誌名	武蔵野大学人間科学研究所年報
号	2
ページ	83-91
発行年	2013-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000416/

保育者養成におけるソーシャルワークの学びの一考察

～保育実習における指導を中心に～

Social Work Learning in Early Childhood Care and Education Training:
Focusing on Teaching at Nursery-school Internships

矢野 明 宏
YANO, Akihiro

百 瀬 ユカリ
MOMOSE, Yukari

五十嵐 淳 子
IGARASHI, Junko

概 要

児童福祉法第18条の4や『保育所保育指針解説書』（2008年厚生労働省作成）等を見ると、保育士は必要に応じて、ソーシャルワークを展開することが求められている。実際、保育現場に目を転じてみると、日常の保育のほか、子どもたちを取り巻く家庭環境などから生じる生活課題の解決に向けて、ソーシャルワークの必要性が時代を追うごとに求められていることが実感できることも少なくない。当然、保育士の支援の対象も子どもだけではなく、両親をはじめとする保護者やそれらを取り巻く環境（たとえば、関係諸機関、地域住民等）も視野に入れた支援が必要となってくる。保育実習においても、以上のような視点を取り入れた実習プログラムが作成されてきている。

本稿は、以上のような現状のなか、保育実習指導や保育所所長及び地域別保育研究会等の意見を集約することを通して、保育者養成におけるソーシャルワークの学びについて、吟味・考察しているものである。

目 次）

- 1．はじめに
- 2．保育士養成課程における教科目の変更と各科目の目標
- 3．保育実習の目的と各実習の目標
- 4．保育実習における保護者支援の現状
- 5．保育実習指導における保護者支援
- 6．新任保育士に欠けていると思われる技量
- 7．おわりに

8. 参考文献

キーワード：保育所保育指針の改定、保育実習、ソーシャルワーク、保護者支援、実習スーパービジョン、実践力、保育士の技量

1. はじめに

家族の形態が多様化した現在、子育てに関する複雑な問題を抱える親が多くなり、子どもの保育とともに保護者に対する支援も進めていくことが必須となっている。子どもと家庭を取り巻く環境が著しく変容している中で、近年、子育てを巡って様々な問題が生じ、子育てに困難や不安を抱える親が増加している。

その大きな原因の一つが親の育児ストレスにあると言われているが、こうした状況の背後には都市化、核家族化の進行に伴い人間関係が希薄になり、子育てが孤立化し、親の子育て不安を一層助長しているという状態がある。そのような現状の中、地域全体で子育てを支援していく姿勢が問われており、子どもの保育の専門家である保育者が保護者の子育ての問題や悩みに関して、ソーシャルワークの視点から相談助言を行うことが求められている。

保育士に求められる専門性として、保育ソーシャルワークが強調されているが、保育ソーシャルワークとは柏女・橋本（2010）は主たる担い手として、社会福祉士、ソーシャルワーカーであって、保育に関する知識・技術・経験を有する専門家と保育の専門家である保育者であって、ソーシャルワークの知識・技術・経験を有する専門家の2種類をあげている¹。

子育てのニーズが多様化している保護者に応え、子育ての悩みや不安を相談しやすい身近な存在としての場を提供する必要性が生じている。保育士は身近な存在として相談に乗り、子育ての問題や気苦労を強く感じている親が気軽に、できる限り迅速に満足のいく相談を受けられるようにし、解決の方法を一緒に考えていくことが必要だとされている。

保育園は保護者が子育ての悩みや不安を相談しやすい場所として場を提供し、保育士は身近な存在として相談に乗る。問題の共有化を図り、速やかに「子どもの最善の利益」が考慮された支援をしていく方法を探ることが望ましいと言える。

そこで、本研究では保育実習指導や保育所所長及び地域別保育研究会等の意見を集約することを通して、保育者養成におけるソーシャルワークの学びについて、考察していくこととする。

2. 保育士養成課程における教科目の変更と各科目の目標

保育所保育指針の改定では、保護者に対する支援の重要性が改定ポイントの一つとしてあげられており、「保護者支援の基本を明らかにした上で、保育所に入所している子どもの保護者に対する支援と地域における子育て支援を示す。」と記されている²。保護者とともに子育てを進めていくにあたって、保育所保育指針は「保育士の専門性を生かした保護者支援」を打ち出しているのである。

また、保育所保育指針では、「相談・助言におけるソーシャルワークの機能」³が明記されており、保育士の重要な役割として保護者支援の占める部分が大きくなっていることが明確化された。さらに、保育所保育指針の改定を受け、保育士養成課程の見直しを行うため、保育士養成施設の修業教科目等の新設・変更が行われた。特にソーシャルワークに関連がある科目の変更と各科目の目標については【表１～４】のとおりである⁴。

今までの「社会福祉援助技術」の科目を分割し、保護者に対する保育指導を学ぶ「保育相談支援」を新設した。教科目の名称変更では、「社会福祉援助技術」を「相談援助」とし、「養護内容」を「社会的養護内容」とし、「家族援助論」を「家族支援論」へと変更することで、再整理を行った⁵。

【表１ 保育相談支援（演習1単位）の目標】

保育相談支援の意義と原則について理解する。
保護者支援の基本を理解する。
保育相談支援の実践を学び、内容や方法を理解する。
保育所等児童福祉施設における保護者支援の実践について理解する。

【表２ 相談援助（演習１単位）の目標】

相談援助の概要について理解する。
相談援助の方法と技術について理解する。
相談援助の具体的展開について理解する。
保育におけるソーシャルワークの応用と事例分析を通して対象への理解を深める。

【表３ 社会的養護内容（演習1単位）の目標】

社会的養護における児童の権利擁護や保育士等の倫理について具体的に学ぶ。
施設養護および他の社会的養護の実践について学ぶ。
個々の児童に応じた支援計画を作成し、日常生活の支援、治療的支援、自立支援等の内容について具体的に学ぶ。
社会的養護にかかわるソーシャルワークの方法と技術について理解する。
社会的養護を通して、家庭支援、児童家庭福祉、地域福祉について理解や認識を深める。

【表４ 家族支援論（講義2単位）の目標】

家庭の意義とその機能について理解する。
子育て家庭を取り巻く社会的状況等について理解する。
子育て家庭の支援体制について理解する。
子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開と関係機関との連携について理解する。

３．保育実習の目的と各実習の目標

保育実習の目的とは、講義で学んだ理論や技術を、実践的な活動を行うことによって体験から学び、理論の実践化を図る。さらに、保育士としての資質向上を目指し、自覚と責

任をもって行動できる豊かな人間力を育成することである。

保育実習のねらいとしては、以下のことがあげられる。

- (1) 子どもとの生活を通して、子どもを理解する。
- (2) 授業で学んだことと実践との統合を図る。
- (3) 保育士の職務を理解し、その役割の一端を経験する。
- (4) 具体的な指導技術を習得する。
- (5) 保育士となるための自覚をもつ。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(雇児発第1209001号、2003(平成15)年12月9日)の別紙2「保育実習実施基準」では、「保育実習の目的 - 保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする。」と定められている⁶。

各実習の目標は、【表5～7】に整理したようにあげられている⁷。

保育実習Ⅰ～Ⅲの各目標の中で、ソーシャルワークの観点が見受けられる点については、保育実習Ⅰでは、(3)既習の強化の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。保育実習Ⅱでは、(3)既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。保育実習Ⅲでは、(2)家庭と地域の生活実態に触れて、児童家庭福祉及び社会的養護に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支

【表5 保育実習Ⅰの目標】

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。(2) 観察や子どものかかわりを通して子どもへの理解を深める。(3) 既習の強化の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。(4) 保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する。(5) 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。 |
|--|

【表6 保育実習Ⅱの目標】

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。(2) 子どもを観察やかかわりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。(3) 既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。(4) 保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価等について実際に取り組み、理解を深める。(5) 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。(6) 保育士としての自己の課題を明確化する |
|--|

【表7 保育実習Ⅲの目標】

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 児童福祉施設等(保育所以外)の役割や機能について実践を通して、理解を深める(2) 家庭と地域の生活実態に触れて、児童家庭福祉及び社会的養護に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を養う。(3) 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。(4) 保育士としての自己の課題を明確化する。 |
|---|

援のための知識、技術、判断力を養う、ということがあげられる⁸。

4．保育実習における保護者支援の現状

保護者支援では、保護者とともに子育てを進めていくにあたって、保育士は専門的な知識や技術、倫理を用いて「一緒に考える」ことのみだけでなく、「一緒に行く」ことを意識し、子育ての不安を少しでも軽減することができるようにする。さらに、子どもが日々生き生きと過ごせるための支援を行うことが重要である。

実際の保育実習では、保護者支援に実習生が自らかかわるということではなく、担当保育士と保護者のかかわり方を見ながら学んでいくということになる。実習生を見てみると、人間関係に疑問や不安を感じている学生が多く見られる。ソーシャルワークで必要とされている「受容」という点を学ぶ以前に、保育士や保護者などの大人とのかかわりでは、社会人としてのマナーを意識したかかわりが求められ、苦勞している姿が見受けられる。

保育実習での保護者支援、家庭支援の学びの場では、送迎時の場面を利用して行われることが多い。また、保育実習中に保護者面談が行われる際は、実習生が担当保育士の指示を受け、面談の環境設定の手伝いをするということもある。

ソーシャルワークの視点から保育実習を見ていくと、上記の場面だけでなく、保護者支援で取り組んでいる事例に対して、保育園全体で問題の共有化を図る場面に実習生が参加できる機会を与えてほしいという思いもある。

筆者（五十嵐）の経験では、保育実習巡回の際に園長先生に保護者支援の学びの機会を与えてほしいと伝え、そのような場面を設定してもらおうということが多々あった。保育実習では、目的には保護者支援を学ぶということが明記されているが、実際は子どもや利用者とのかかわりの場面が主となり、保護者支援、家庭支援のかかわりまでいかない場合が多いのが現状である。

学生が実習で気づくことは、座学では事前指導ですでに学んでいることが多く、実践や実習を通して理論と実践の統合が図られ、理解の深まりが出てくる。しかし、忙しさに追われている保育現場で、子どもや保護者への援助や指導において実際に学んだ知識と実践を統合することにおいては、実習中に事前に援助技術を尋ねたり、指導を仰いだりする時間がなかなかとりにくい現場の状況も問題となっている。

したがって、養成校側が実習園にどのような学びの機会を与えてほしいかを具体的かつ明確に伝えていく必要がある。紙面だけで伝えるのではなく、養成校が実習園と懇談会等を設け、活発な意見交換をすることは大変有効である。

また、社会福祉士養成校では、巡回指導の他に当然のごとく設定されている帰校日指導だが、保育士養成校で帰校日を設けているところは少ない。帰校日を設けることで、実習期間中に得た学びを学校で整理することができる。この効果として、教員と学生の個人スーパービジョンの有効性はさることながら、教員が適切な働きかけを行うことによって、グループスーパービジョンやピアスーパービジョンの視点からも多くの有益な学びがもたらされているという強い実感をもつ⁹。

今後、保育士養成校でも実習期間中に実習の学びを深めていく帰校日指導その他のいわゆる「中間振り返り」の取組みは一層重要となってくるであろう。

5．保育実習指導における保護者支援

筆者（五十嵐）の勤務していたA保育士養成校は、保育コースの教員数は6名であり、学生数は1学年50名で計100名の2年生課程の養成校である。幼稚園教諭二種免許と保育士資格の両方を取得でき、少人数教育に取り組んでおり、保育実習前に、保育参加の機会を多く取り入れていることが特徴である。

保育所保育指針では「保育所におけるソーシャルワークでは、一人一人の保護者を尊重しつつ、ありのままを理解し受け止める「受容」が基本的姿勢として求められます。」と言及している¹⁰。そこで、事前指導においては、人とのかかわり方を学ぶ手段の一つとしてロールプレイを取り入れた授業を行った。学生がそれぞれ与えられた役割を演じることで、相手の気持ちを理解し、人間関係を構築する練習をしている。学生を見ていると、子どもへの対応より圧倒的に保育者との対応、大人とのかかわり方において戸惑いが見られ、自分自身の動きを否定的に捉え自信喪失をする傾向が強く感じられる。

今後の授業では、今のロールプレイを発展させ、実際の保護者支援の場で必要となるカンファレンスシート等を使用する。加えて、園便りや連絡帳等、保護者に対しての情報を提供するものについて実際に書くだけでなく、それらを使用しながらより実際に近い形でロールプレイを行うことや、反省会の場面等における保育者同士のかかわりにも重点を置き取り組んでいきたいと考えている。

事後指導では、全体で行うものと個別に行うものがあるが、個人指導では、実習評価表を基に、学生の課題を見出し、次に活かすにはどうしたらよいかを共に考えることを行っている。さらに、実習の振り返りシートや自己評価表などを使用し、自己課題を明確にする指導を行っている。

個人では、一度の実習で体験できる保育園は一園であり、時には配属先の園での保育観が自分の考えとは合わなかったと感じることもある学生も見受けられる。そこで、実習生同士でお互いに情報や意見を交換し、共有することで、他の保育園についても知る機会を与えている。それぞれの実習園での体験を比較・考察できるようにグループに分け、違う実習体験を報告し合い、意見交換を行うなど、学生同士で積極的に討論できる機会を与えている。

今後は、事後指導においても保護者支援の項目に視点を置き、保育実践演習等の科目と並行して、「実践力」をつける取り組みが必要である。例えば、実習での実際のかかわりを通して、保護者支援や家庭支援において学んだことを報告する場を設け、学習の向上につなげていくように配慮することで、具体的な報告を行う。さらに、自己課題を見出し、遊びや発達段階とは何かということに加えて、保護者支援とは何なのかという考察を深め理論化へ導き、次の実習や就職につなげていきたいと考えている。

6．新任保育士に欠けていると思われる技量

以上、保育実習指導の観点から、ソーシャルワークの学びについて論じてきたが、ここでは、現場の責任者である保育所所長が新任保育士に欠けていると思われる技量について語ってくれたことからソーシャルワークの学びについて考えてみたい。

筆者（百瀬）はB県保育研究大会第7分科会（平成23年5月開催、第49回大会）の助言者として、18園の保育園から問題提起されたものをまとめた結果、新任保育士に欠けていると思われる技量として、以下の3点があげられた。

（1）ソーシャルネットワークについての知識不足 キーワード 社会資源

保育士は、保護者からさまざまな相談を受けるようになる。また、日々保育を実践していく中で気になる子どもの支援が必要なケースも見られる。このような場合、一つ一つの事象に対して、所長や主任に相談して、適切な対応をすればよいと思われるが、実際には担任としてどのように対応すればよいのかわからず、担任自身で抱えてしまう保育士が多いのが実態だということである。

したがって、それぞれの場面に対して「どこにつなげばよいのか」を知っていることが保育士としての専門性を身につけていることになる。言い換えれば、保健所、児童相談所等機能と役割についての知識である。いわば、社会資源についての十分な理解が必要ということであろう。

保育士養成校での重要な学びとして、上記の点に関してぜひ見直してもらいたいという要望が現場から多くあがっている。

（2）出産前の母親をサポートするための知識の不足 キーワード 連携

今回の保育所保育指針が改訂されて、保育所は子育て支援センターとしての役割を果たすように努めるといった項目が加えられた。しかし、新任の保育士は、例えば出産前には何が必要なのか、といったことが答えられないことが多いということである。

子育て支援を行う上でも、産婦人科医院との連携や、マタニティ教室の必要性などを勘案すると、保育士養成の段階で、こうした専門知識を学んでおいてほしいと考えられる。

（3）ボーダーライン層の子どもに対しての備え

現在、小学校入学前に健康診断として「5歳児」の秋の健康診断（就学前健診）が実施されている。しかし3歳児半健診あたりでも、日常生活面において発達の状況に若干問題傾向のみられる子どもが増加している傾向がある。その場合、保護者に担任保育士から直接そのような状況について説明することは容易ではない。そこで、実質的には4歳児健診が実行されることが望ましいと考えられる。

実際に子どもとかかわる専門職である保育士としては、一人ひとりの成長・発達の姿を的確にとらえ、同年齢（月齢）の子どもの実態を正確に判断できる能力（アセスメント能力）が必要であろう。

保育現場からは、以上の点を十分に認識したうえで、保育士養成校での指導を進めてほしいとの要望があげられた。

7. おわりに

今回は、筆者らが行った実習指導や第49回B県保育研究大会で得た現場の意見を集約することにとどまってしまったことは否めない。これは、謙虚に反省しなければならない。しかしながら、今回の取り組み等の振り返りの中だけでも、保育士として、保育現場内の子どもへの保育だけではなく、家庭や地域にも目を向け、実情を把握し、関わっていく必

要があることを見出したうえで、「子どもの最善の利益」・「個人の尊重」・「受容」・「社会資源」・「連携」などのキーワードが出てきた。

保育実習では、専門技術の習得だけではなく、調和のとれた社会の一員としての時間を持てるように、様々な面から人の生活を支えていく専門性及び人間性を高めることが重要であると言える。どの学生も実習先で自分が役立ち感謝されることに喜びや効力感を持つことができると、自己の価値を見出し自分自身の成長を感じていくことにつながる。

社会福祉士実習においても、自分の適性を図ることや、実習の成功体験を通し自己効用感を得る場としての実習の意義を見出すことができた¹¹。

保育士は子育ての肩代わりをするのではなく、地域とのつながりを保ちながら、子どもが健やかに育つためにも、子育てが楽しいと感じられるように、子育てをする親を「育てる」ということが大切な視点として挙げられることを忘れてはならない。

ここに今まで以上にソーシャルワークの視点を意識した学生への働きかけを行うことによって、保育者養成においても違和感を感じることなく、学生にソーシャルワークについて実感をもって、学んでもらうことができるのではないかと考える。筆者（矢野）がC保育士養成校（2年生課程の養成校で、幼稚園教諭二種免許と保育士資格の両方を取得できる。各学年45名定員）で担当している「相談援助（後期配当40名受講）」¹²の授業においては、学生たちが経験してきた実習事例（社会福祉施設・保育所・幼稚園等）を、ソーシャルワークの視点から吟味することを通して、保育士として育むべき「相談援助とは何か」、つまり、「ソーシャルワークとは何か」についての授業を展開している。

保育士は専門的な知識や技術、倫理を用いて「一緒に考える」ことはもちろんだが「一緒に行く」ことを意識し、子育て不安を少しでも軽減することができるようにする。保育士は子どもと過ごす生活が本来持っているはずの喜びや楽しさを体験している。だからこそ、その楽しさを保護者に伝え広げていくことが重要である。子どもが日々生き生きと過ごせ、保護者が安心して子育てをできるように支援することも保育士の使命であることをソーシャルワークの視点を取り入れる保育実習での学びを通して伝えていきたい。

さらに、今後は保育実習をはじめ、ソーシャルワーク関連科目を有機的に結びつけ、学生自身が実際に体験してきたことを手がかりに、ソーシャルワークを理解し、保育現場でその視点を活かした支援ができるためのプログラムの具体的な開発を目指して研究を進めていきたい。

【参考文献】

- 相澤譲治編『六訂 保育士をめざす人の社会福祉』憐みらい、2012年
五十嵐淳子「保育士として求められる資質とは 実習の振り返りを通して」桜の聖母短期大学紀要 36号、2012年
NHK学園社会福祉士養成課程編『相談援助実習サブノート』NHK学園、2011年
奥典之・森内智子「保育士養成教育における保育ソーシャルワーク - 必要性和その理論化 - 」日本社会福祉学会第60回秋季大会 口頭発表 2012年
柏女豊峰監修『保護者支援スキルアップ講座』ひかりのくに株式会社、2010年
上村麻耶・千葉弘明・仲本美央編著『保育者養成実習事後学習』大学図書出版、2012年
川村隆彦『支援者が成長するための50の原則』中央法規出版、2009年
小林育子『演習 保育相談支援』憐萌文出版、2010年

- 近喰晴子・百瀬ユカリ「保育所保育指針改定に伴う研修のニーズについて」秋草学園短期大学紀要（25）
2008年
- （社）日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場教員テキスト』中央法規出版、2009年
- 杉本浩章・田中和彦・中島玲子『実習生必携 ソーシャルワーク実習ノート』㈱みらい、2011年
- 鈴木敏彦・横川剛毅「保育士業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究 - 保育所保育士の保護者支援を中心に - 」和泉短期大学紀要（30）2009年
- 武田英樹「地域に求められる保育士によるソーシャルワーク」近畿大学豊岡短期大学論集（5）2008年
- 中野菜穂子「保育所の『機能拡充』をめぐる動向と課題 - 保育所の地域活動を中心に - 」岡山県立大学短期大学部研究紀要（4）1997年
- 野沢正子「子育て支援概念と保育所保育の方法技術 - 『措置保育』から『子育て支援保育』への転換」『社会問題研究』46（1）1996年
- 橋本好市・直島正樹編著『保育実践に求められるソーシャルワーク』㈱ミネルヴァ書房 2012年
- 松本しのぶ「保育士に求められるソーシャルワークとその教育の課題 - 地域子育て支援をめぐる動向から」秋草学園短期大学紀要 15号、2007年
- 松本寿昭『社会福祉援助技術』同文書院、2004年
- 丸山アヤ子「子育て支援センターの概要」溝口元・寺田清美編『家庭支援論』アイ・ケイコーポレーション、2011年
- 百瀬ユカリ・丸山アヤ子「保育所併設型の地域子育て支援拠点における保育士の役割」秋草学園短期大学紀要（28）2011年
- 百瀬ユカリ「現職保育者研修会を通しての一考察」秋草学園短期大学紀要（23）2006年
- 山本真実「保育所機能の多様化とソーシャルワーク - 特集ソーシャルワーク実践としての家庭支援 - 」『ソーシャルワーク研究 26（3）通巻103号』相川書房、2000年

【注】

- 1 柏女豊峰・橋本真紀『増補版 保育者の保護者支援 保育相談支援の原理と技術』株式会社フレーベル 2010年 97頁
- 2 厚生労働省『保育士保育指針解説書』株式会社フレーベル 2010年 184頁
- 3 前掲書2 184-185頁
- 4 関東信越厚生局健康福祉部指導養成課「指定保育士養成施設のカリキュラム改正に係る説明会」2010年 43頁、47-50頁
- 5 <http://www.mhlw.go.jp/index.html> 保育士養成課程検討会「保育士養成課程等の改正について」2010年
- 6 <http://www.mhlw.go.jp/index.html> 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」2003年
- 7 全国保育士養成協議会編『保育実習指導のミニマムスタンダード』㈱北大路書房 2007年 107頁、111-112頁
- 8 前掲書7 107頁、111-112頁
- 9 筆者（矢野）の所属校での社会福祉実習の帰校日の際にこのあたりを特段の意識をもって行っている。今後、そこでの知見を積み重ね、帰校日におけるスーパービジョンのあり方について、有効なプログラム化を図っていきたいと考えている。
- 10 前掲書2 85頁
- 11 今橋みづほ・矢野明宏「社会福祉士養成実習における体験の意義について」日本社会福祉学会第59回秋季大会 ポスター発表 2011年
- 12 C保育士養成校では、前期に「相談援助」を開講している。これは、1年次の「社会福祉」の学びを踏まえ、学生の身近で起こっている課題を提示しながら「相談援助」において保育士として必要と思われる基本的な相談援助理論習得のための授業を行っている。